

アジア研究図書館

編集・発行：東京大学アジア研究図書館 館長 小野塚知二

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当 asialib@lib.u-tokyo.ac.jp

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

第1号 目次

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| 1 アジア研究図書館開館 | 8 連載・奇書・好著 —“書痴学”の勧め— 第1回 |
| 2 館長挨拶 | 上原究一「神山閏次旧蔵本『忠義水滸全書』」 |
| 4 東京大学アジア研究図書館の将来像 | 12 連載・アジア映画の迷宮 第1回 |
| 5 連載・先達の先見 第1回 | 韓燕麗「アジア映画の味方／見方」 |
| 古田元夫「アジア研究図書館にかけた夢」 | 14 アジア研究図書館開架(総合図書館4階)利用案内 |
| 6 連載・アジアの言語・文字体系 第1回 | 14 次号以降の予定 |
| 永井正勝「ヒエログリフ」 | |

アジア研究図書館開館

東京大学アジア研究図書館の開架部分(総合図書館4階)が10月1日より供用を開始しました。2013年にアジア研究図書館設置の構想を始めてから7年余を経て、さまざまな人のお力を借り、紆余曲折はありましたが、ようやく開館にこぎつけました。

4階入り口脇には、本学名誉教授木村清孝先生(インド哲学・仏教学)に揮毫していただいた銘板が掲げられています。



5万冊配架の予定

開館時点で開架に収められているのは約2万冊です。学内のさまざまな図書館・図書室から移管作業中のものが約9千冊、移管準備中のものが約1万6千冊ありますので、これらがすべてそろそろ4万5千冊となります。開架部分に配架可能なのは約5万冊で、今後さらに充実を図る予定です。

館長挨拶

2020年10月1日

小野塚 知 二

東京大学アジア研究図書館長

東京大学経済学研究科教授

わかりました。

図書館という容れ物と中身

東京大学本郷キャンパスでは、1928年に竣工した現在の総合図書館建物の大規模な改修工事が2015年に始まりましたが、それも今年度内には完了の見込みとなり、地下深くには自動書庫も設置されました。新しい図書館を創る構想がいよいよ実現しつつあります。この新図書館は、図書など所蔵資料の収集・整理・保存・提供だけでなく、デジタル化や情報社会化といった時代の流れに対応した新しい図書館サービスの提供も目指しています。わたしたちが2013年から準備してきたアジア研究図書館も、そうした全体構想の一角をなすものです。

東京大学は、漢籍、中国語文献、韓国・朝鮮語文献、あるいは旧植民地関係資料（朝鮮、台湾、旧満州などに関する図書・統計など）をはじめ、多数のアジア関係図書を保有しています。それは数十万冊にのぼる一大コレクションといっても過言ではありません。ただし、これらの図書や資料は総合図書館のほか、東洋文化研究所、文学部、経済学部、法学部、農学部、教育学部、情報学環、社会科学研究所など各部局図書館・図書室に分散しています。典型的な例が中国関連図書です。そのため、これら図書を利用する側から見ると、所蔵図書を効率的に利用できる環境は、これまで充分には整備されていませんでした。そこで、2013年7月から8月にかけて、アジア研究図書館を実現する可能性とおよその規模感をつかむために、人文科学・社会科学系を中心とした関係部局に対して予備的なアンケート調査を行ったところ、多くの部局がアジア研究図書館の計画に賛同してくださり、資料の提供と集約に協力していただけることが

アジア研究図書館の第一の目標

アジア研究図書館は、従来は各部局の図書館・図書室がそれぞれ保有してきた図書・資料を可能なかぎり集中運用して、利用者に対して総合的で効率的な図書館サービスを提供することを一つの目標としています。現時点では、総合図書館4階に、基礎的な図書を手に取って眺めることのできる開架(約5万冊)を設置し、続いて、各部局から移管される膨大なアジア関係図書を収納する総合図書館自動書庫(閉架式)、東洋文化研究所図書室に併設する漢籍類を置く分館、および人文社会系研究科に設置される分室(漢籍コーナー)を設置することを予定しています。

本年10月1日には4階開架の供用を開始し、その後、自動書庫・分館・分室も順次、利用に供するため準備を進めているところです。アジア関連文献(ベトナム語、タイ語、ヒンディー語、アラビア語などの各国・地域の現地語文献を含む)の整理には、附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門(U-PARL)も積極的に関与してきました。U-PARLの尽力なしには、アジア研究図書館の今日はありえなかったでしょう。

アジア研究図書館のもう一つの目標

東京大学アジア研究図書館は、現地語文献にもとづく地域研究や図書館学に精通した専門図書館員(サブジェクト・ライブラリアン)の育成も計画しています。将来的には実際に専門図書館員を配置し、高度な研究支援機能を発揮することも視野に入れています。さらに、東京大学のアジア関係の蔵書の効率的運用だけでなく、学内外のアジアに関する人材

と研究資源が集まり、展開する、拠点として、文字通りの「研究図書館」としての機能すること、これがアジア研究図書館のもう一つの大きな目標です。「東京大学憲章」(2003年)では、「自らがアジアに位置する日本の大学であることを不断に自覚し、日本に蓄積された学問研究の特質を活かしてアジアとの連携をいっそう強め、世界諸地域との相互交流を推進する」と規定していますが、そのための大きな一歩をアジア研究図書館は踏み出そうとしています。

アジア研究図書館のさらなる発展のために

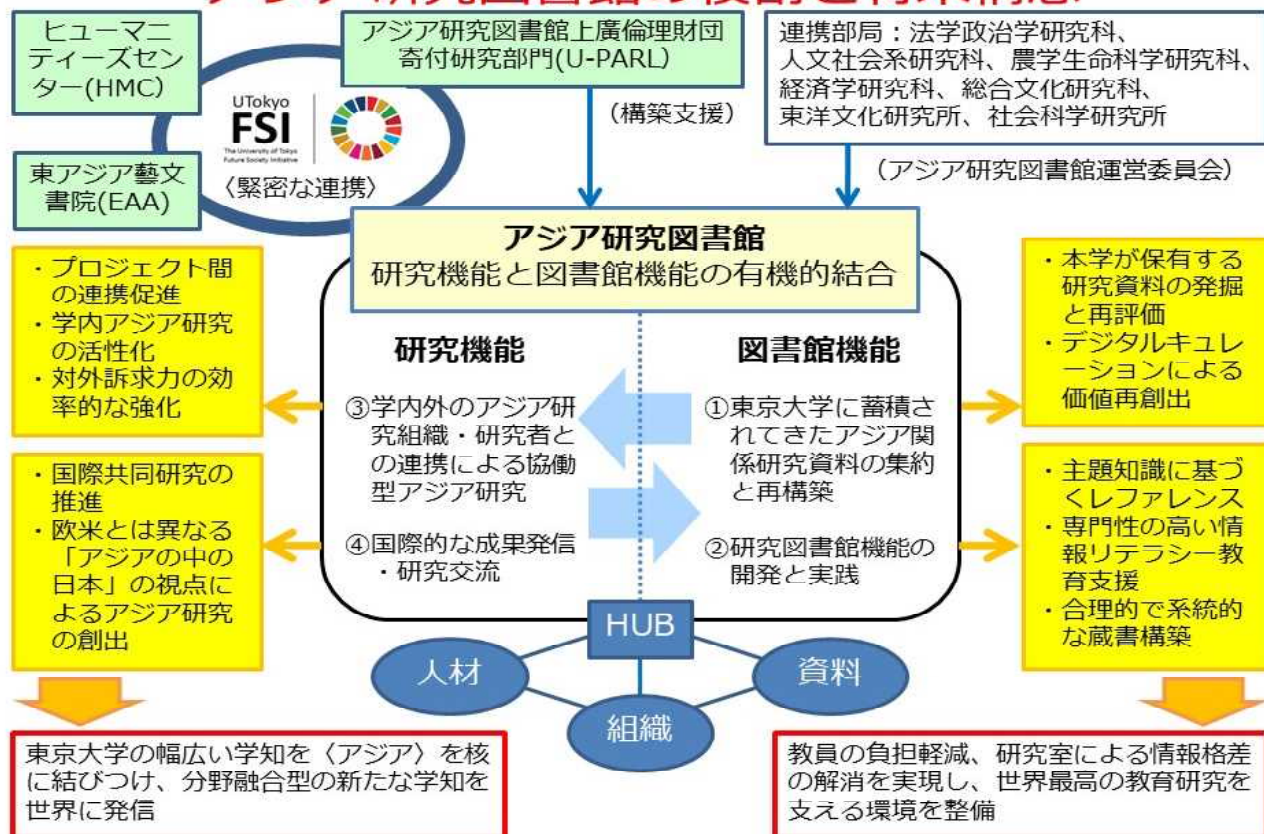
アジア研究図書館は、部局図書館・図書室が所蔵してきた既存図書を集中運用するだけでなく、これまで個人的な営為によって収集されてきた諸地域の貴重な現地語文献・資料を寄贈図書として受入れて、研究者の利用に供することも考えています。

こうして、アジア研究図書館がさらなる発展を遂げるには、たくさんの課題を達成しな

ければなりません。夢が大きく膨らむと同時に、課題の多さと大きさを前にして足がすくむ思いもいたします。しかし、課題をひとつずつ克服し、先輩たちから受け継いだアジア研究図書館という構想をまったき形で実現させることができるなら、それは間違いなく日本を代表し、世界に誇りうるアジア関係図書館の誕生を意味するでしょう。また、東京大学アジア研究図書館が、将来、学内外・国内外のアジア研究機関と連携して図書館サービスを提供すれば、日本のアジア研究はさらに進展するでしょう。

わたくしどもは今後、このアジア研究図書館のウェブサイトとニューズレターを通じて、さまざまな関連情報や進行中の活動について発信していきたいと考えています。みなさまのからの絶えざるご協力・ご支援を期待するとともに、アジア研究図書館について忌憚のないご意見をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

アジア研究図書館の役割と将来構想



東京大学アジア研究図書館の将来像

2019年4月1日
小野塚 知 二

アジアを軸とした研究資源の集約と研究機能の連携

東京大学に蓄積されたアジア関係の文献・資料は、本学が培ってきた多様な研究関心を反映して、東アジアのみならず、東南アジア、南アジア、西アジア・北アフリカ、中央アジア、東北アジアなど、アジアの諸地域を遍く覆う豊かな広がりを見せています。これらのアジア関係の文献・資料は、世界に誇りうる膨大なコレクションを形成しているといえましょう。ところが、これらの貴重な資料は、さまざまな学部や研究所の図書館・図書室・研究室に、いわば「分散」して保存され、利用に供されてきました。その理由のひとつは、大学が学問の方法別に組織されてきたことにあります。特定の方法に基づき、対象認識に努めるという知的活動により、学問の伝統が築き上げられてきたのです。しかし、いま、学問の方法は大きく変わろうとしています。「文・理」や専門分野を越えた知の統合・融合・連携が求められています。さらにはデジタルデータという新しい資料が加わりつつあり、この充実と活用も求められています。

アジア研究図書館はこの付託にこたえるべく、まず、研究資源の集約化を図るものです。アジア諸地域に関する広範な文献・資料を可能な限りアジア研究図書館に集積させるとともに研究者を配置した図書館を目指すことにより、新しいアジア研究を生み出す研究拠点の形成を目指します。そのためには、専門分野間の、また、本学と国内外の諸機関との間の多様な架橋（bridging）が必要でしょう。

なぜ、アジアなのか？

アジア研究図書館は、アジアに関する研究を日本から世界に発信していくことを目指しています。その対象とするアジアの領域は東アジアから西アジアにまで及んでいます。では、なぜアジアを研究するのでしょうか。最近までの過去数世紀の世界の歴史は、「進んだ」西洋と「遅れた」非西洋の非対称な関係を一つの基調としてきました。その結果、非西洋における学問は、西洋生まれの概念や枠組みを受け入れるのみならず、西洋対自己という一対一の関心に縛られる傾向を持っていました。しかし、世界の構造は、いま、大きく変化しつつあります。これからの世界では、相異なる歴史や価値観を背負った多様なアクターの間での多方向的な学び合いがますます重要になります。そのなかで人類は非西洋からも多くを学んでいくでしょう。翻っ

て日本を見るなら、そこには非対称な関係のなかで西洋とアジアの狭間に自己を位置づけようともがいてきた歴史があります。日本にとって、西洋・非西洋という二項対立を乗り越えた学び合いのなかで特にアジアと対話を深めていくことには、より良い自己認識を実現する上でも大きな意義があるといえましょう。アジア研究図書館を舞台に展開するアジアを軸とした研究は、そこに集う世界の研究者の多様な関心と共鳴しながら、アジア研究の枠をこえた新たな相乗効果を生み出していくでしょう。アジアを軸に多彩な人と学問が結びつき、行き交いながら新しい知の空間を開拓していくこと、それがアジア研究図書館の願いです。

研究する図書館

アジア研究図書館の構築は、新しい知のあり方を模索し、方法融合的な新しいアジア研究の基盤となる試みです。この基盤を構築するためには、良質な研究資源を集約させるとともに、専従の研究者ならびに専門図書館員を擁することが求められます。アジア研究図書館におけるアジア研究には、第一に、アジアに関する文献の総合的な研究があってしかるべきでしょう。文献の内容（テキスト）だけでなく、文献学・書誌学・古文書学、さらに文献を成す紙・印刷・筆記法・製本・造本などについての研究が求められます。また、専門図書館を土台にして形成され、専門図書館を支える人材として「サブジェクト・ライブラリアン（専門図書館員）」あるいは「キュレータ」等の高度専門職の配置・育成を行う必要もあるでしょう。

アジア研究の世界的な拠点を目指して

アジア研究図書館が世界規模の研究拠点となるためには、東洋文化研究所のアジア研究図書館分館、人文社会系研究科のアジア研究図書館分室（漢籍コーナー）、附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）などの連携・協力によって、アジア研究図書館が高度なレファレンス機能を発揮するとともに、研究・発信を進め、内外の同種の研究図書館との間に緊密な協力関係を構築する必要があります。また、アジア研究図書館は、学外ならびに外国人研究者の受入態勢も整備して、新たな研究空間を提供することも企図しています。これらの新たな営みを通じて、唯一無二の図書館を世界の仲間とともに創り上げていこうではありませんか。

アジア研究図書館にかけた夢

古田 元夫

(ふるた もとお 日越大学学長、元東京大学附属図書館長)

アジアを向く東京大学

私は、アジア的価値が欧米的価値にまざっていることを唱えるような意味での「アジア主義者」であるつもりはないが、21世紀の東京大学は、もっとアジアを向くべきだと思っていた。「アジアとヨーロッパ」という対抗軸の意味がなくなっている時代に、何でいまさら「アジア」なのかという批判があったが、私としては、「アジアとヨーロッパ」という図式から脱するためにも、よりアジアに向く姿勢を強める必要があると考えたつもりである。

こうした私が、「アジアを向く東京大学」づくりに関与する機会が、三つあった。一つ目は、2003年に制定された東京大学憲章の「前文」にある、東京大学の国際的位置に関する記述である。憲章は、「世界の公共性に奉仕する大学として、文字どおり『世界の東京大学』となる」ことを謳っているが、その国際的位置については、「東京大学は、自らがアジアに位置する日本の大学であることを不断に自覚し、日本に蓄積された学問研究の特質を活かしてアジアとの連携をいっそう強め、世界諸地域との相互交流を推進する」としている。この箇所は、起草委員だった私が、最も力を入れた部分だった。

二つ目は、2001年に発足した、日本を含むアジアを対象とする研究者が部局の枠を超えて集まり、新しい教育や研究の可能性を探るために設立された東京大学の機構としての「東京大学日本アジアに関する教育研究ネットワーク」である。この

提唱者の一人だった私は、これは、バーチャルに〈Tokyo School of Asian Studies〉をつくる構想であると考えていた。

そして三つ目が、総合図書館を大幅改修する「新図書館計画」（アカデミック・コモンズ）の中に、総合図書館内に「アジア研究図書館」を創設するという話だった。

アジア研究図書館の構想

計画時で、東京大学には約74万冊のアジア研究図書があった。内訳は、図書が36万4000冊、雑誌が12万4000冊、漢籍が25万冊に達していたが、これらは、多数の部局に分散して所蔵されていた。アジア研究図書館は、これらのアジア研究図書を、可能なかぎり、改造後の総合図書館4階、地下自動化書架、およびアジア研究図書館の分室と位置づけられる東洋文化研究所の図書室に集中することを構想した。集中することによって、利便性が増大するとともに、東京大学のコレクションが世界に誇れる質と量をもっていることを、より明示できるだろうと考えられた。

また、アジア研究が多くの部局に分散して担われている構造では、サブジェクト・ライブラリアンを養成して、資料・図書のデジタル化が急速に進展している中で、系統性のあるコレクション形成を行うことに、思い切った資源を投入しにくいという問題がある。「アジア研究図書館」と「研究」という要素をことさら強調したのは、長期的な視野でアジア研

究を支えるコレクションの形成を行える、アジア研究の資料学という意味での研究機能を兼ね備えた図書館にしたいという思いからだった。そうでないと、アジア研究図書館は、ある時点での東京大学のアジア関係図書を一か所に集めただけの、きわめて陳腐な存在になってしまうと思われた。私の構想では、アジア研究図書館は、バーチャルな〈Tokyo School of Asian Studies〉の中核となる、こればかりはバーチャルというわけにはいかない組織だった。

しかし、こうした「夢」を実現するためには、当然ながら、かなりの規模の投資と人材の確保が不可欠だった。アジア研究図書館を含む「新図書館計画」が総長の重点課題だったといっても、こうした資源を学内で調達するのはきわめて困難だった。この点では、上廣倫理財団が、アジア研究図書館構想に深い理解を示し、寄附研究部門として、「東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付兼部門（U-PARL）」が2014年に発足できたのは大きかった。この研究部門は、それまで固有の教員組織をもたなかった附属図書館の初めての教員組織となった。アジア研究図書館は、その誕生に先立って、

附属図書館の性格変化にも貢献したわけである。

未来に向けて

2017年に策定された「アジア研究図書館の理念」は、「東京大学に蓄積されてきたアジア関連資料を集約、再構築し、その知の成り立ちを明らかにすることで、アジアと世界の過去と現在を可視化し、未来を拓く概念を練り上げる場が、アジア研究図書館である。それは、従来のアジア研究の蓄積を尊重しつつ広く新しい文脈へと開き、発見的かつ発信的な新たなアジア研究を浮かび上がらせるものでなくてはならない。そのためには、アジア諸地域の時間と空間を縦横に織りこみ、そこに循環する人・もの・知を探求する、アジア横断的な場の構築が不可欠である」としている。今回のアジア研究図書館の本格開館を迎え、20年前に私が「夢想」した「アジアを向く東京大学」が、かなり実体をもつようになり、大きな感慨をおぼえる。私自身がなしえたことは、ほんの小さなきっかけをつくることだったが、多くの同僚や学内外の協力者の尽力で、アジア研究図書館の今日があることを喜びたい。

連載

アジアの言語・文字体系

第1回

ヒエログリフ

永井正勝

（ながい まさかつ 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）・副部門長、特任准教授）

東京大学アジア研究図書館の開館からおよそ198年前、1822年9月27日、ヒエログリフの解読成果がジャン・フランソワ・シャンポリオンによって読み上げられた。それまで謎であったヒエログリフが歴史や思想を伝える文字として息を吹き返した瞬間である。それ以降、現在まで、字典、辞書、文法書、資料集などヒエロ

グリフを読み解くための書物が数多く刊行されてきた。表記体系の制約により、詳細な文法事項の決定には特に学術的な観点からは難解を極める部分があるのだが、ヒエログリフのテキストは、書かれた内容をある程度知るという目的であれば、現在、ほぼ読めるようになっている。

エジプト土着の言語をエジプト語と呼

ぶ。エジプト語を記すために使用された主要な文字には、ヒエログリフ（聖刻文字）、筆記体ヒエログリフ、ヒエラティック（神官文字）、デモティック（民衆文字）、コプト文字の5種類がある。ヒエログリフは文字種を指す用語であるものの、メトニミーにより言語名を示す用語として使用されることも多い。本稿では、文字としてのヒエログリフを取り上げる。最古のエジプト文字は、20世紀末にエジプトのウナム・エル＝カアブ遺跡で新たに発見された資料群であり、その年代は紀元前3400年頃に遡る。その最初期の文字から、象形文字、表語文字、表音文字、限定符というヒエログリフの造字ならびに表記の基本原則が備わっていた。ヒエログリフを特徴付けるそのような基本原則について、以下、説明しよう。

【象形文字】エジプトのヒエログリフは象形の原理によって作られた象形文字である。人、動物、植物、天体、山や川などの自然、等々、森羅万象の姿が独特のフォルムで文字化された。研究者が学習用に最初に覚える基本的なヒエログリフは約750字ほどである。象形文字というのは文字の作り方、つまり造字法を指す用語であり、象形の原理で作られた文字は、その用字法として、表語文字、表音文字、限定符に区分される。

【表語文字】漢字のように、1文字で1単語を表記する文字を表語文字と呼ぶ。一般には、これを表意文字と呼ぶことも多いが、語全体を示す文字という観点からいえば表語文字の方が適切である。ヒエログリフにも表語文字があるが、ヒエログリフの表語文字には縦棒（手前の文字が表語文字であることを示す限定符）と一緒に添えられるのが通常であるため、1単語の表記が1文字になるとは限らない。図1で、縦棒を除いた部分が象形の原理で作られたヒエログリフであり、左か



【図1】表語文字の例

ら順に漢字の「日」「口」「山」に相当する。漢字を使用する我々には理解し易いものであろう。

【表音文字と限定符】表語文字によって示すことのできる語には限界があるため、文字は自ずと音に頼ることになる。ヒエログリフでも古くから表音文字があった。ヒエログリフは象形の原理で作られた文字であるゆえ、表語文字が中心だと思われていることが多いが、個別の文字の使い方としては、むしろ表音文字が中心である。表音文字のみで書かれる単語は前置詞や小辞などの機能語のほか、名詞や動詞などの内容語でも見られる。その一方で、ヒエログリフの単語表記では語末に限定符と呼ばれる文字を置くことが多い。限定符は発音を持たず語の意味や文字の使い方のみを示す符号である。漢字の「偏」に近い文字だと言える（図2）。



【図2】表音文字と限定符の例

ヒエログリフの「川」「江（コウ）」を示す語は、最初に表音文字で *itrw*（イテ

ル)と表記したのち、漢字の三水(氵)に相当する限定符(水面のさざなみを表した文字が3本)を語末に置く。また、「時」を意味するヒログリフは表音文字でrk(レク)と表記したのち、語末に漢字の日偏に相当する「日」の限定符を置く。漢字の「江」「時」でも、右側の旁が発音を担い(それぞれ、コウ、ジ)、左側の偏が語の意味を示している。これは、漢字の六書でいうところの形声文字である。漢字では1文字が形声文字となっているが、ヒエログリフでは1単語の表記が形声文字と同様な仕組みで作られている。

ヒエログリフやエジプト語の詳細について知りたい人には、ぜひともアジア研究図書館開架フロアの西アジアの棚に足を運んで頂きたい。「6 W:800 X」で始まる請求記号のもと、エジプト語の字典、文法書、資料集が配架されている。辞書は参考図書棚の「R 6:egy」で始まる請求記号で来館者を待っている。実際に書物を手に取り、ページをめくると、知的好奇心が多いに刺激されることであろう。シャンポリオンがヒエログリフ研究を開いたように、アジア研究図書館がこれからのアジア研究の礎となることを切に願っている。

連載

奇書・好著 —"書痴学"の勧め—

第1回

高崎藩大河内松平家・神山閔次旧蔵本『忠義水滸全書』

上 原 究 一

(うえはら きゅういち 東京大学東洋文化研究所准教授 U-PARL副部門長)

「奇書・好著—書痴学の勧め—」というリレーコラム第1回の執筆依頼を頂いたのだが、「四大奇書」と呼び習わされる『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』をはじめとする中国古典小説を研究対象の中心に据えている筆者としては、蛇足気味かとは思いつつも、まずはこの「奇書」という言葉そのものについて一応の説明を加えておきたい。

「奇書」と聞いた際に、皆様は果たしてどのような書物を思い浮かべられるだろうか？奇想天外な設定のもと、外連味溢れる展開が、時に作者の術学趣味を覗かせながら幻惑的に綴られる——そんな文学作品を想起される方が多いのではないだろうか。『ドグラ・マグラ』『黒死館殺人事件』『虚無への供物』の三作が日本の探偵小説の「三大奇書」と称されて

いるのはその代表的事例であろう。しかし、元祖たる中国古典小説の「四大奇書」というのは、決してそういう意味ではない。これは四百年近く前の中国で付けられたおそらく販促用のキャッチコピーであり、現代日本語に訳せば「四大傑作」という程度の意味なのである。

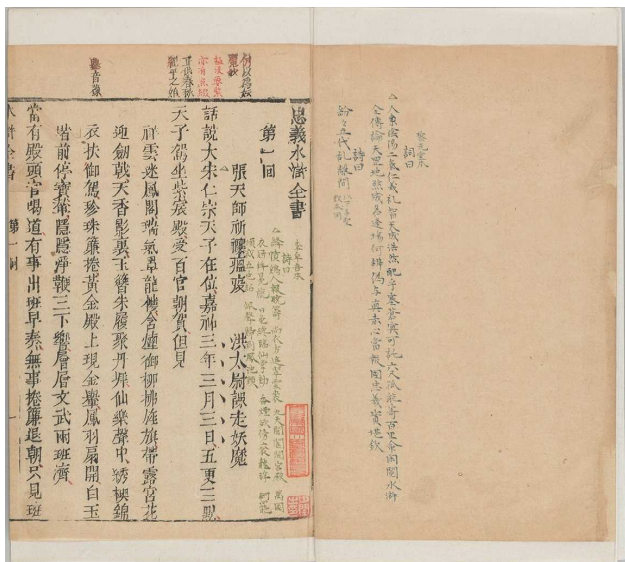
そもそも「奇」という字は「珍しい、普通とは違う」といったくらいが基本的な意味であり、現代日本語においては「奇妙」だの「怪奇」だの「奇特」だのと何やら良からぬ方向に「普通ではない」場合に使うのが殆どになっているものの、中国語においては昔も今も良い方向と悪い方向のどちらにも使われるのだ。その点、近年の若者言葉における「ヤバイ」と同じだと言えれば分かりやすいだろうか*1。だから、「四大奇書」の「奇書」とは、

*1 もっとも、「ヤバイ」は長らく悪い方向にのみ使う言葉だったのが、ここ数十年で良い方向にも使われるようにシフトしたもので、日本語における「奇」とは正反対の変遷を経ているのだが。

作品の面白さや完成度といった点において「普通ではない」ということであって、それは結局「傑作」という意味になる、という訳である。なお、中国古典籍における「奇書」という言葉の用例は、「物理的な意味で珍しい本」、つまりは現代日本語の「稀覯本、貴重書」といった意味合いで使われているものも少なくなく、「四大奇書」というキャッチフレーズの定着以前には、むしろそちらの方が一般的な用法だったようにも思われる。

さて、本筋に戻ろう。本リレーコラムは、アジア研究図書館はもとより、それのみならず東京大学全体に所蔵される膨大な点数のアジア関係資料の中から、面白いもの、珍しいもの、変わったもの、そしてもちろん研究の役に立つものなどを紹介しようというのが趣旨だと伺っている。つまり、この場合の「奇書」とは、上記全ての用法に当てはまると捉えておくのが一番だろう。要するに、きっとこれは「ヤバい」本の紹介コーナーなのだ。

その第1回を飾るものとして、ここは



やはり元祖「四大奇書」から1点、『忠義水滸全書』不分巻百二十回（東京大学総合図書館貴重書、請求記号：A00-6376）を紹介したい（図1）。そもそも『水滸伝』とは、12世紀初頭の北宋の末期を物語の舞台として、梁山泊という山寨に集った108人の英雄豪傑が活躍する架空の物語で、南宋の早い時期から語り物やお芝居など様々なジャンルで人気を博して多彩な発展を遂げた末に、明の時代に白話文で書かれた長篇小説として今日に伝わる形を成した通俗文芸作品である。遅くとも16世紀前半までには長篇小説としてまとめられていたが、その後も版を重ねるごとに多くの人々の手によって、文章の一字一句の書き換えからエピソードの大幅な増減に至るまで大小様々な改編が施され続けて、20世紀初頭までに木版印刷によって作られた本に限っても、何十種類ものバージョンが現存している*2。

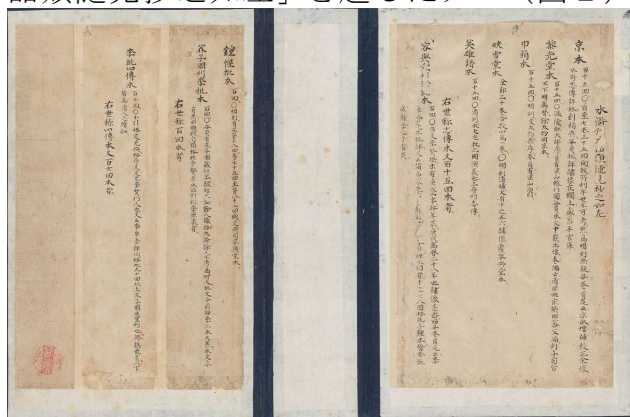
では、その中で東大総合図書館の貴重書指定まで受けているこの『忠義水滸全書』なる本は、一体何がどうヤバいのだろうか。出版時期が早いのか——そうではない。この本の版木の作成はおそらく17世紀後半以降であり、残本であれば16世紀中頃らしきもの、完本に限っても16世紀末や17世紀初頭のものが残っている『水滸伝』諸本の中にあっては、多様なバージョンの中でも時期の上でも系統的にも後出に属する。では、現存点数が少ないのか——それも違う。同じ版木から刷られた本は世界各地に併せて何十部と現存している*3。実は、この本を貴重書たらしめているのは、日本にもたらされ

*2 なお、この辺りの事情をより詳しく知りたい向きには、村松昂・小松謙『図解雑学 水滸伝』（ナツメ社、2005。東京大学アジア研究図書館所蔵、請求記号：2-03 J:900 c:mat）をお勧めしたい。表紙のイラストだけ見ると『水滸伝』もののゲームの攻略本か何かかしらと思ってしまうような本なのだが、ところがどっこい第一線の『水滸伝』研究者による極めて良質な入門書である。

*3 それらを互いに細かく比べてみると、印刷の時期によって版木の差し替えが繰り返されており、それに伴う本文の変化を丹念に研究すると色々面白いことが分かるのだが、それはまた別のお話。

てから江戸時代の名も知れぬ人物によって施された書き入れの存在なのである。

この書き入れが実にヤバいのだ。何と、6種類もの別バージョンの『水滸伝』諸本との校勘結果を、緑・朱・藍・藤脂の4色を使い分けて細かく記しているのである。100万字に迫る分量の大部な本を7種も対校するというだけでも本当に大変な仕事だが、真のヤバさはそれが江戸時代になされていたという点にある。校勘に使われた諸本はいずれも17世紀までの中国で出版されたものだから、当時としても珍しい舶来品だ。しかも、それぞれが何十部も何百部も輸入されていたようなものではなく、日本中探してもせいぜい数部しか存在していなかったであろう本ばかりである。当時であって、そのような諸本の存在を網羅的に把握していたというだけでも、既にもうただ事ではない。その上、もちろんコピーも写真もない時代であるから、詳細な校勘をしているということは、6種全てに時間を掛けて目を通す機会を得ていたということになる。また、他に少なくとも2種の存在を把握していたことが分かる「水滸刊本品類随見抄之如左」と題したメモ（図2）



も附されている。愛書家・蔵書家の同好会的なネットワークは江戸時代にも存在していたとはいえ、インターネットはおろか電話もなく、手紙を送るにも飛脚が走って行くというような時代にあって、これだけの校勘を実現させるのはどれだ

け大変なことであっただろうか。『水滸伝』のような通俗小説が本場の中国で学術的な研究の対象にされるようになったのは20世紀になって以降のことであるから、それに先駆けて日本でこれほど高度な研究作業がなされていたというのは、全くもって驚異的なことだとしか言いようがない。なお、この本はもともと高崎藩大河内松平家が所蔵していたものなので、歴代藩主いずれかの命を受けた人物が藩の事業として取り組んでいたのではないかとの仮説も提唱されている。

この本は、他の大河内家旧蔵書ともども神田にあった村口書房という古書店に買い取られ、1929年に目録販売に出された。後に和漢書誌学の大家となる若き日の長澤規矩也氏（1902－1980）がその目録を見て中国古典小説の豊富さに驚き、すぐさま店頭へ駆け付けた時には、先んじて来店したただ一人の人物によって、この本は既に購入された後だったという。その人物とは、奇しくも群馬県知事を務めたこともあった、元官僚の神山閏次氏（1870-1943）である。蔵書家としても聞こえた神山氏は殊に『水滸伝』を好んだようで、他にも『水滸伝』の稀覯本を数点所蔵しており、自ら紹介論文までものしている（神山閏次「水滸伝諸本」、『斯文』第12編第3号、1930）。神山氏により北京の古籍専門店で送られて綺麗に装訂し直された上で戻って来たこの本は、1935年に神山氏所蔵の他の『水滸伝』諸本と共に東京帝国大学に寄贈され、そのまま東京大学総合図書館貴重書となって現在に至っている。

なお、神山氏がこの時に寄贈した『水滸伝』諸本は今では何故か総合図書館と文学部漢籍コーナーとに所在が分かれてしまっているのだが、アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門(U-PARL)が中心となって構築を進めている「アジア研

究図書館デジタルコレクション」(<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/asia/page/home>)

内のコーナー「水滸伝コレクション」では、神山氏旧蔵本も含めた学内各所に散らばる『水滸伝』諸本をデジタル化公開し、ウェブ上において並べて閲覧出来るようにすべく準備を進めている。神山氏旧蔵の『水滸伝』諸本の中では、既に同じ総合図書館貴重書の『鍾伯敬先生批評水滸傳』百卷百回(請求記号:A00-6267)が公開済みであり、この本も今年度内には公開予定である。高精細なカラー画像によって肝心の書き入れもしっかりと読み取れるはずであるから、公開の暁には是非ともアクセスしてみて頂きたい。

また、この本と同時に村口書房を通じて売り出された大河内家旧蔵書のうち、長澤規矩也氏が購入した数点は後に東京大学東洋文化研究所に入っており、これらは東文研ウェブサイト内の「雙紅堂文庫全文影像資料庫」にて、白黒画像ながらデジタル化公開済みである。また、目玉商品として他とは桁の違う値が付けられていた『西遊記』や『三国志演義』の16世紀末や17世紀初頭の刊本計4点は、北京の北平図書館(現在の中国国家図書館の前身)が購入して、戦中のアメリカへの疎開を経て1965年に台湾に送られ、現在では台北の故宮博物院の所管となっている。更に、大河内家旧蔵の中国古典小説には蔵書印が全く捺されていないため確認はかなり困難なのだが、神山氏も長澤氏も購入しなかったものが、どうも他にもまだ幾つかあったらしい。その全貌の把握は、今後に残された研究課題である。

最後に、この本の書き入れについての研究論文を収めた本も色々な意味でなか

なかの「奇書」なので、それも併せて紹介しておきたい。白木直也『江戸佚名氏水滸刊本品類随見抄之の研究——水滸傳諸本の研究 その五』(著者自印、1972。東京大学総合図書館所蔵、請求記号:E46:414)である。「その五」とある通り、これは白木氏による自費出版の『水滸伝』研究論集シリーズの第5冊である。総合図書館の書庫には全5冊が並んで揃っているが、自費出版で発行部数が少なかったと思しく、『水滸伝』研究史上非常に重要なシリーズであるにもかかわらず、所蔵機関はごく少ない*4。また、広島大学文学部教授を長年務めた白木氏は、1966年にこのシリーズの「その一」を刊行して以降、間に定年退官を挟みながら、足掛け7年の間に、5冊をいずれも百数十ページの厚さで出している。なんとも驚異的な刊行ペースである。そして、この「その五」には殆ど当てはまらないのだが、このシリーズの「その一」と「その二」は、学術書なのになんとも外連味たっぷりの口語寄りの文体で綴られているのが大きな特色である。表記の面でも「言う」でも「いう」でもなく頑固に「ゆう」を貫いたり、「ゼッタイに」「タイヘンな」「ジジツ」「チャンと」「コトバ」「ハナシ」「このテの」といったカタカナ書きを頻繁に用いたりしていて、最初はエラクとつきにくいのだが、読みなれるとこれがナカナカ癖になってくる。ただ、「その三」以降はぐっと外連味が薄れた文体になり、表記も「言う」を採用しだしたりカタカナが激減したりしているので、初期2冊の特異な文体と表記は、残念ながら周囲の評判はあまりよろしくなかったのかもしれない。

*4 但し、現在では5冊とも「国立国会図書館デジタルコレクション」の図書館送信資料に入っているので、以前より閲覧は格段に容易になった。

アジア映画の迷宮

アジア映画の味方／見方

韓 燕麗

(かん えんれい／HAN Yanli 東京大学総合文化研究科教授)

アジア映画という言葉から、どのような映画が連想されるのだろうか。ブルース・リーやジャッキー・チェンに代表される賑やかな香港のカンフー映画がすぐ頭に浮かぶ方もいれば、インドのサタジット・レイ監督による『大地のうた』などオペラ三部作における静的な映像を思い出す方もいるだろう。ひとくちにアジア映画といってもその中身は当然のことながら千差万別である。しかし一つ断言できるのは、現在において、多くのアジア映画が世界的に非常に高く評価されており、映画といえばハリウッドまたはヨーロッパ映画という旧来の映画鑑賞の常識は、もはや通用しないことである。

1980年代から台頭しはじめた中国大陆の第五世代や台湾ニューウエーブの監督たちが、カンヌやベルリンなどヨーロッパの各映画祭を席巻していたのは、ついこの間のことだと思いきや、今年のアカデミー賞の授賞式では、韓国のポン・ジュノ監督による『パラサイト 半地下の家族』は英語ではない外国語映画にもかかわらず、脚本、監督、作品賞などの主要大賞を総なめしたという前代未聞の偉業を成し遂げたのである。映画の世界ではすでに、アジア映画を見ないで映画好きと言えるのか、と大いに疑って良い時代に入っている。

これからの連載記事に道案内されながら、「アジア映画の迷宮」の中で楽しんでいただくうちに、私自身も含む読者全員がきっとアジア映画の＜味方＞に、あ

るいはいま以上の＜味方＞なるに違いないだろう。しかし、宮殿の中を気ままに歩き回る前に、入り口の前でいま一度、アジア映画の＜見方＞について考えてみてはいかがだろうか。

日本は、地理学的にアジアの極東に位置しながらも、地政学的にはアジアに属しないと自認する国である。後進国のアジア諸国で制作された映画は、戦時中など極めて特殊な時期を除いて、戦後において長い間、日本では研究対象どころか、見る対象としてすら考えられていなかった。映画研究の分野で、アジア映画について論じるものが頻繁に見られるようになったのは1980年代以降のことであるが、初期の先行研究の中ではやはりヨーロッパ近代が作り出した国民国家というフィクションを、映画に当てはめて論じているものが多かった。むろん、研究対象を絞るためには、なんらかの枠組みが必要だし、世界地図に描かれた黒々とした国境線が、そのまま映画の区分になる場合もほとんどである。しかし、ことアジア映画について語る場合、欧米の映画作品と比べ、アジアのとある国の「国民文化」についてお勉強をするための良き教材、という扱い方が顕著に見受けられると言わざるを得ない。

私が尊敬するある映画研究の先行者が、『アジア映画』（第三文明社、1993）というご著書の中で、「映画は基本的には自国の文化をやや美化して表現するもの

である」と、断言的口調で見解を述べた。1993年に刊行されたやや古い本とはいえ、いまだ普段見ないアジアの映画を見た後の感想として、知らなかった彼の国の「国民文化」について勉強できたと満足げに述べる方が、一定数存在していることも事実であろう。そうした見方が、国民国家の内部に限定されたナショナルな文化としての国民文化が存在することを前提に、その「国民文化」の一環として「国民映画」が生産されているという発想に基づいていることは、言うまでもない。すでに多くの学者から指摘されているように、純粋で固有な文化という概念は、国民国家の時代が生み出した幻想にすぎない。さらに言うと、「ハリウッド映画を見てアメリカ文化について勉強できた」というような感想を述べる人がほとんどいないのは、欧米中心の価値観や世界の見方がすでにスタンダードとして内面化され、知らないうちにその色眼鏡を掛けた状態でアジア映画を見ているためだと考えられるだろう。

むしろ、映画は特定の社会的な力関係のなかで作られた生産物である。一本の映画を鑑賞することから、作中に描かれる物語の歴史的・社会的背景について新たな知見を得るという映画の楽しみ方を否定するつもりはない。しかしアジア映画を見る時、初めて目にするその国または地域の映像である場合が多いからこそ、一、二の作品だけで単一のイメージを固定させないという自覚をつねに持つことが、＜見方＞としてとりわけ重要になってくるのではないだろうか。

さらに、人々が国境を越えて移動しつつあり、どこ土地にも他所から来た人間が暮らしているというのは、移動の世紀であり映画の世紀でもある20世紀の常である。

筆者は中国本土以外の場所に居住する

中国系移民によって製作された中国語映画について研究している。例えば1920年代のマレー半島では、中国語字幕のサイレント映画が現地に住む中国系移民によって作られた。また1930年代のタイでは、広東語によるトーキー映画が現地で作られ、フィリピンや香港など東南アジアの各地で上映されていた。これらの映画は中国映画、マレーシア映画またはタイ映画のいずれのカテゴリーにも属さず、国別の映画史から零れ落ちたまま、長いあいだ人々に忘れ去られていた。しかし＜アジア映画＞という枠組みで考えてみると、アジアで暮らす人々の文化的生産物として、歴史書に書かれていない人間の営為を記録した貴重な一コマとして、われわれはこれらのフィルムを記憶すべきではないだろうか。

ここまでの話は一応アジアという地域の中で考えてみた。しかし、アジア映画といえばアジアの中で作られたものに限られるのだろうか。筆者の研究対象には、じつはアメリカにいる中国系移民が作った映画も含まれている。例えば1930-40年代のサンフランシスコのチャイナタウンで、中国系移民によって広東語映画が作られ、北米各地そして香港、シンガポールなど東南アジアで上映されていた。これらの映画は、むしろアメリカ映画または中国映画として考えられていないが、アジアに出自を持つ人々が作った、アジアの言語によるものとして、アジア映画と称すべきとはいえないだろうか。また、筆者は専門に研究していないが、中国系以外のアジア移民の映画をどう捉えるべきだろうか。

「アジア映画の迷宮」に入り込む前に色々と読者のみなさまを混乱させるような問題を提起してしまったが、アジア映画の見方からアジアないし世界の見方も変

わることを期待するのは筆者だけではないと思う。筆者もこれから読者の一人として、ただ「迷宮」の見取り図を提供してくれることを待つのではなく、記事か

らパズルのピースを一つずつ集め、自らのアジア映画見取り図を作り上げることを、心から楽しみにしている。

アジア研究図書館開架（総合図書館4階）利用案内

開館日：以下閉館日を除くすべての日

閉館日：年末年始(12月28日～1月3日)

定例休館日(概ね毎月第4木曜日)

夏季の一斉休業日(2日間)

試験等大学行事のための閉館日

その他臨時閉館も含め、アジア研究図書館の開館日・開館時間は総合図書館本館と同じです。

詳細はホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/calendar>

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

開館時間(総合図書館本館の開館時間と同じ)

曜日等	通常期	8月・3月
月～金曜日	8:30～22:30	8:30～21:00
土・日・祝日	9:00～19:00	9:00～17:00

貸出冊数・期間：10冊・30日(教職員・学生)

カウンターサービス：平日9:00～17:00

この時間以外の貸出は、自動貸出機、返却は1階総合カウンターへお持ちください。

学外者：学外者のご利用につきましては、ホームページをご覧ください

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide/guide>

次号以降の予定

第2号は2021年1月4日に、第3号は2021年4月1日に発行予定です。

アジア研究図書館の収書状況など図書館機能の充実と、研究機能の展開状況についてお知らせするほか、アジア研究図書館と、東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付部門(U-PARL)、東京大学ヒューマニティーズセンター(HMC)、東京大学東アジア藝文書院(EAA)など連携プロジェクトとの共同の催事についても案内いたします。

四つの連載記事(先達の先見、アジアの言語・文字体系、奇書・好著 ―“書痴学”の勧め―、アジア映画の迷宮)も続きます。

ニュースレターおよびその記事についてご要望があれば、東京大学アジア研究図書館宛(asialib@lib.u-tokyo.ac.jp)お知らせ下さい。

編集後記

ようやく開館と、ニュースレター第1号の発行と、ホームページの更新に漕ぎ着けました。

今回の疫病以前、2018年にアジア研究図書館運営委員会が立ち上がった頃から、本当に2020年度中に開館できるのだろうかという不安を常にどこかで感じながら、少しでも前に進むことを心がけてきました。ようやく第一歩です。

ここまで到達するには、学内外の実に多くの方々のお力とお智慧を借りました。いつも、学生さんには、「最低3人の信頼できる仲間を得て、最低3年間は協力して、事に当たるなら、必ず実を結びます」と言ってきたのですが、今回はその何倍もの人数と年数とを要してしまいました。

東京大学では久しぶりになる新しい図書館の開館にご期待下さい。みなさまとともにある喜びを感じています。これからもよろしく。 [D]